

上谷の丘

「自分も他者も大切に、聞いて考え行動し、挫けずやり抜く子どもを育てる学校」

2026年、令和8年を迎えました。十二支では「午年」（うまどし）、十干十二支では「丙午」（ひのえうま）の年にあたります。保護者の皆様はご存じのことかと思いますが、丙午には以下のような意味があるそうです。

- ・ 丙：陽の「火」を表し、太陽のような明るさや情熱、強い意志を象徴する。
- ・ 午：陽の「火」に属し、行動力やスピード、エネルギーを意味する。
- ・ 丙午：「情熱と行動力で突き進む」「燃え盛るようなエネルギーで道を切り開く」

上谷小の子供たちには、強い意志をもって思い描いたことを行動にうつせるようになってほしいと思います。

さて、これまでの学校だよりにおいて、本校が道徳科の研究に取り組んでいることをお伝えしてきました。遡ること5月号では、「目の不自由な男の人が横断歩道を渡れない様子に気付いた「ぼく（男の子）」は、知らない人に声をかけることへの不安や緊張を乗り越えて声をかけることができた」というお話で、「親切」のテーマについて子供たちと保護者のみなさんで考えていただきました。「ぼく」をとおして「助けたいけど、知らない人には声をかけにくい」「声をかけないと男の人は渡れない、どうしよう」など、「分かっているけど、どうしたらいいのか。わかっているけど、するのは難しい。」といった人間理解に焦点を当て道徳科の学習を進めています。

「人間理解とは言うけれど、そもそも“人間らしさ”とは何か」と思い、この休みに『人間らしさ』（上田紀行著：文化人類学者、角川新書）、という本を読みました。

人類の歴史を振り返ると、私たちが農耕生活を始めたのは約1万年前であり、それ以前の狩猟採集の時代が人類の歴史の大半を占めていることが分かります。狩猟採集社会では、自然と共に生き、獲物を集団内で平等に分ち合うなど、利他性が大切にされていました。一方、農耕の始まりとともに物を蓄えるようになり、社会には階層や格差が生まれ、利己性が強まっていきました。上田氏は、「このように人間は狩猟採集社会で優越していた利他性と、農耕社会以後に優越するようになった利己性との両方を備えていることが分かります。そして、利己性を利他性で抑え込んできたのが人間らしさなのです」と述べられています。人間にはこのような両面性があることを前提に、改めて道徳科では、道徳的価値について人間理解に焦点を当て、子供たちと共に考えていきたいと思えます。

また、根拠はなくても希望をもつことも、人間らしさ、人間性の一つであると、上田氏は述べられています。「世界の漫画界に衝撃を与える漫画を描きたい」という思いを胸に、困難を乗り越えながら創作に取り組まれた、やなせたかしさんはその希望をもち続けた一人です。そのやなせさんが作詞した「アンパンマンのマーチ」には、次の一節があります。

なんのためにうまれて なにをして生きるのか

こたえられないなんて そんなのはいやだ

保護者の皆様は、どのようなことをお考えになられたでしょうか。お子様に、どのような人になってほしいか、どのように生きてほしいと考えられたでしょうか。

上谷小の子供たちが、これらの問いに自分なりの答えを見いだせるよう、道徳教育を中心としたさまざまな教育活動を、今後も充実させていきたいと思えます。

本年もどうぞよろしくお願ひいたします。